

上野英信

追われゆく
坑夫たち



上野英信

追われゆく
坑夫たち

追われゆく坑夫たち

定価はカバーに表示してあります [同時代ライブラリー 197]

1994 年 9 月 16 日 第 1 刷発行

著 者 うえの ひでのぶ
上野英信

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
同時代ライブラリー編集部 03-5210-4136

印刷製本・精興社

© Hidenobu Ueno 1994

ISBN 4-00-260197-8

Printed in Japan

まえがき

福岡県の北部を縦走して玄海灘にそそぐ遠賀川の流域一帯、七市四郡にわたる筑豊炭田は、ほぼ一世紀にちかい年月にわたって全国総出炭量のおよそ半分におよぶ量の石炭を産出しつづけ、日本最大の火床として繁栄をほこってきた。わが国の資本主義化と軍国主義化をおしすすめる重工業の歯車が、この黒い熱エネルギーによって廻転した。三井・三菱をはじめ大小もろもろの財閥がこの地底から富をすいあげて今日の基礎をきざきあげた。筑豊——それはまことに近代日本の「地下王国」であつた。そしてこの擧げないぶきにみちあふれた地下王国をささえてきたものは、日本の資本主義化と軍国主義化のいけにえとなつた民衆の、飢餓と絶望であつた。土地を追われ、職をうばわれ、地上で生きる権利と希望のいつさいをはぎとられた農漁民、労働者、部落民、囚人、朝鮮人、俘虜、海外からの引揚者や復員兵士、やけどされた戦災市民、……それぞれの時代と社会の十字架をせおつた者たちが、たえるまもなくこの筑豊になだれおちてきた。巨大な怪獣の口にも似た無数の坑口は、あくことをしらぬどんな食欲をもつて彼らの肉体をのみこみ、血にまみれた石炭といっしょに彼らのうちくだかれた骨を吐き

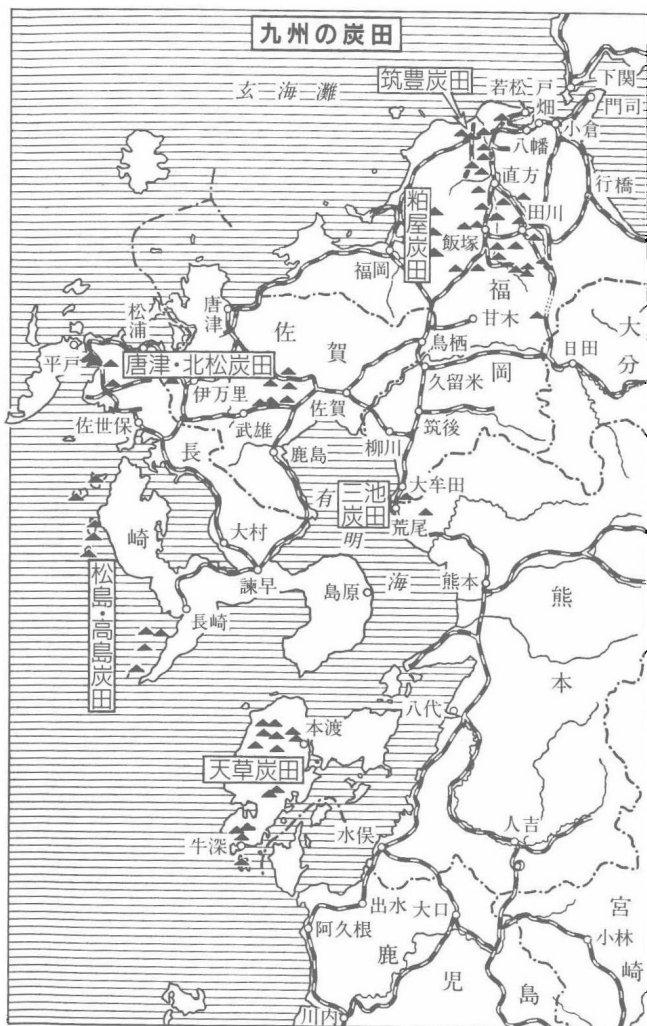
すてつづけてきた。しかし、こうしてわが国の資本主義的發展とともに發展し、あいつぐ帝國主義戦争のなかで膨張してきたこの地下王国も、最後のあだ花に似た朝鮮戦争ブームを境にして急激な衰退をはじめ、深刻な不況におちいつてしまった。そしていま、地上から追いはらわれた者たちの飢餓と絶望によってひらかれた筑豊は、ふたたび地底から追いはらわれてゆく者たちの飢餓と絶望によってとじられようとしている。日本資本主義の火の床は、日に日に数えます失業者たちの冷えきった死の床と化しつつある。

とはいえ——、炭鉱の合理化問題や失業問題について論じることが私の目的ではない。さまざまな人々がそれぞれの角度からそれらの問題について論じてきた。そしてまた、さまざまに興味ある集団的な調査報告が重ねられつつある。今におよんで私がなにを書きくわえる要がある。にもかかわらず、あえて私をして語らしめようとするもの、それはむなしく朽ちはててゆく坑夫たちの歯をくいしばった沈黙であり、あえて私をして筆をとらしめようとするもの、それは組織されずにたおれてゆく坑夫たちのにぎりしめた拳である。

危機の波にのつて石炭産業は退いてゆく。しかし、坑夫たちはその無限の深みの底にいる。そこへもぐり、彼らの眼をもたぬ魚のような魂のなかに入つてゆかなければならぬ。

「地獄極楽、いつてきたもんのおらんけんわからん。この世で地獄におるもんが地獄じゃ」娘のころは父につれられて、結婚してからは夫とともに、うまれた娘が大きくなるとその娘

をつれて、一生を暗黒の地底で働きつめたひとりの老婆がいつもこう呪文のようにつぶやいていた言葉を、私は忘れることができない。私のききあやまりではない。彼女は決して「この世の」とはいわなかったし、まして「この世の地獄が地獄じゃ」などとはいわなかった。彼女はあたかも「この世で悪魔をみるものが悪魔だ」とでもいうような調子でたしかに「この世で地獄におるもんが地獄じゃ」といつていた。そうだ、私にとって問題であるもの、それは「この世の地獄」ではなくて、「人間そのものとしての地獄」であり「地獄そのものとしての人間」である。



カバ―・中扉装画 〓 千田梅二
扉・カバ―デザイン 〓 福井ケン

目次

まえがき

1 下罪人 1

2 追われ流れて 87

3 底幽霊 139

あとがき 213

上野英信年譜 217

地底の魂（鎌田慧） 227

1
下
罪
人



S炭鉱・その閉山前後

現在は八幡市に合併されているが、筑豊炭田におけるもつとも古い炭鉱町のひとつであり、麻生・伊藤とともに「筑豊御三家」のひとつに数えられる貝島炭鉱の創業の地として知られる香月町という、地下足袋の底のようなわびしい部落がある。そしてここには今もなお貝島の経営するO炭鉱があり、S炭鉱はその租鉱権炭鉱である。ところでこのS炭鉱は、月産約千三百吨、従業員約百三十名、筑豊のいたるところに散在する同規模の炭鉱とおなじようにこぢんまりとまとまった貧弱な小ヤマのひとつにすぎないが、しかし、このヤマの内状はながいあいだ窺い知るべくもなかった。そしてまた、このヤマについて語ることはこれまでタブーとされてきた。理由はほかでもない。経営者であるS一家の手段をえらばぬ報復を恐れてである。S炭鉱の労働者自身も、たとえどのように暴力的な制裁や言語に絶するほどの苛酷な搾取をうけようと、かたく口をとぎして泣きねいりをしてきた。その恐るべき内状を外部の第三者にもらすことはむろん、夜寝床のなかで妻に語ることさえはばかってきたという。



しかし、昭和三十四年六月、ついにこのS炭鉱もつぶれた。「鉱所内に立入る者は理由の如何を問わずただちに処分す」と記された大きな立札は、今もなお社宅街の要所要所にたちだかつているが、もはや凶器をかまえて外来者をおしはばむ者の影はみあたらない。そしてこれまで絶対に苦痛をもらそうとはしなかった坑夫たちも、「どげちこげち、こげなひどか監獄ヤマは生まれてはじめてたい」とまえおきして、悪夢からさめた子供のように、昨日までの苦しみを訴えはじめている。そうだ、絶対的な例外性という点において、ここもまた例外ではありえなかっただけのことだ。株式会社という帽子をかぶった暴力団であり、事業所という壁をめぐらした監獄であり、従業員として登録された囚人であり奴隷であるという点で、なんと小さいの中小炭鉱は似ていることか。ただS炭鉱の坑夫たちからきいた次のような話には、さすがの私も驚かすにはおれなかった。

そのひとつは、坑内の保安検査にやってくる鉱山保安監督官の眼をごまかすために、保安状態のわるい現場や鉱区外の盗掘箇所に通じる坑道を崩壊させて密閉し、たびたび作業中の坑夫たちを生き埋めにしてきたという事実である。後でふたたび掘りあけて救出しているのだから文句はあるまいと会社側は主張するだろうが、もし密閉されているあいだに事故が起ったとすれば一体どうなるのか。そしてまた、ただでさえ通気のわるい坑内を密閉して数時間も放置するということは、まるでガス爆発を経営者自身の手で起そうとすることではないか。「いつま

で待つておつても炭車が入ってきません。そのうちにどんどん熱くなり、息が苦しくなつてくるので、とうとうたまらなくなつて坑道をあがつていつてみると、坑道がつぶれて閉じこめられていました」「保安官が入坑してこられるたびに、今度こそ訴えてやろうと決心するのですが、鉾長や勤労係が保安官のまわりをとりまいて私たちをそばによせつけませんから、どうにもこうにもなりませんでした」私は慄然として膚はだにあわだつものを感じながら、生き埋めにあつた坑夫たちの告白をきいた。次に紹介するたどたどしい鉛筆書きの文章は、ついにたまりかねて福岡鉾山保安監督部に投書しようとして、ひとりの採炭夫が書き記したものの一部である。

昭和三十三年四月十二、三日頃鉾山保安官来坑し午後二時頃依り坑内入坑のため、坑口依り約五十米メートルから六十米の間をダイナマイトで落磐し作業員の昇坑をていしする。約二十三名が坑内に二時間ぐらゐとじこめられる。

昭和三十三年十一月二十三日頃同じくとじこめとなる。約三時間ぐらゐ生いきうめと成る。約十七名ぐらゐ。

昭和三十三年十二月十八日も同じくとじこめと成る。約四時間ぐらゐ生うめと成る。二十四名ぐらゐ。

昭和三十四年三月頃も同じく生うめと成る。約二時間ぐらゐ。二十八名ぐらゐ。

もうひとつ私が驚かされたのは、毎週土曜におこなわれる「大出し」とよばれる特別増産運

動に課せられたケタはずれのノルマである。土曜日に翌日の分まで出炭させて公休日の減産を埋めあわせようとするこの大出しは、今もなお多くの炭鉱で実施されている古い陋習であるけれども、それにしてもS炭鉱のノルマはあまりにも大きすぎる。平日の四倍という数字を耳にした時、私はどうしても信じきれずにこうききかえた。「え、四倍だつて？ 四函のまちがいじゃありませんか」「いいえ、四倍ですくさ。平日は一人あたり二函半が基準ですばってん、大出しの日には一人十函ださんとなりませんけん」「しかし、そんな、四倍などという石炭が一体どうしてだせるのですか」私は彼の説明をきいてもなお信じきれずに、ふたたびこうききかえた。これでは公休日の埋めあわせどころか、なまじつか週に一日の休日があるために、途方もない労働強化をうけていることになるではないか。公休日などというものがないほうが、どれだけ幸福であろう……。

「そりゃ、もちろん減多にだせるもんじゃありませんたい。二函半だすのにさえ十時間も十二時間もかかることが珍らしいはないとですけん。ばって、だしたこともあります。去年の十二月のことでした」と、彼はその殺人的大出しを完遂した時のことを語ってくれた。二百五十函だせ、そうすれば給料として五十万だそうと会社が約束した。そのころはもう半年におよぶ給料の遅配で、労働者は十円の金にも飢えていた。「正月は眼のまえにきておるわ、一粒の米もないわ、子供たちは夏シャツ一枚でふるえておるわ、というような状態でしたけん、おぼ

れる者は藁をもつかむのたとえで、その五十万ほしきの一心で狂うたごと働きました。土曜の朝から日曜の晩まで喰いもせず休みもせず、ただもう氣違ひのように炭を掘りつづけて、とうとう二百五十函だしました。人間の欲というやつは恐ろしいもんですばい」それで五十万円は支給されたかどうかと私はたずねた。「なーにが、五十万どころか、たったの十万でした。一人あたり千円にもなりませんでしたたい」そして彼は思ひだすだけでゾツとするというような表情でつけ加えた。「とにかく土曜という日ほど、恐ろしい、苦しい日はありませんでした。だれがいいだすもののうゝ土曜地獄」と呼んだものですが、ほんとうに土曜がちかづいてくると命のちぢまるげな氣のしたもんですたい……」

こうして悪辣きわまる手段で搾取に搾取をかさねて全盛をほこつてきたS炭鉱も、しかし、不況の波にだけは抗すべくもなく、昭和三十三年に入ってから深刻な経営難におちいつてしまった。そして、そのしわよせはすべて労働者におしつけられ、百三十名の労働者とその家族は日に日に飢餓地獄へ追いこまれていった。まずはじめに賃金の支払い状況をみてみよう。三十三年四月から閉山された三十四年六月までの十五カ月間に支給された賃金の内訳は次のとおりである。

現金 約一〇%

金券 約三〇%